

[要旨]

ミクロストリアと質的研究法

鈴木 良和

本稿は、ミクロストリアの方法論に関する文献サーベイである。伝統的には人文科学に位置づけられる歴史学は、いかに大々的に量的な手法を採用したとしても、いずれかの場面で必ず質的な考察が不可欠となる、そのような学問である。ところが歴史研究においても量的研究のトレンドが生じ、量的方法こそが歴史学を「真の科学」に変えることができるという期待をともないつつ、系列的な史料の統計分析を主軸とする「系の歴史学」が一時期、歴史研究の主流派の位置を占めるに至った。ミクロストリアは、歴史学のこのような動向に対する反省を背景として1970年代のイタリアで誕生した。本稿の目的はこのミクロストリアの展開を史学史的に辿り、その基本的な考え方や課題について紹介することである。まず初めに、カルロ・ギンズブルグの徴候解読型パラダイムとジョヴァンニ・レーヴィの社会関係に焦点を当てたアプローチを紹介し、次にポストモダニズム、グローバルヒストリー、新たな量的研究という観点から、ミクロストリアのその後の展開について概観する。